参考資料３

京都市環境審議会
令和７年度第１回 環境基本計画策定検討部会　会議録

日　時　　令和７年５月１４日（水）　午前１０時～午前１１時４０分
場　所　　京都市役所本庁舎１階　環境政策局会議室（環境総務課執務室内）
※オンラインとのハイブリッド
出席者　　大久保委員、小幡委員、桜井委員◆、千葉委員◆、吉積委員◆（五十音順）
（参考：欠席者　大島委員、尾崎委員、細川委員、山口委員）
◆：オンライン出席

１　開　会

松下環境企画部長から挨拶

２　議　題

〇環境基本計画策定検討部会の進め方について

・　事務局からの資料１についての説明を踏まえ、意見交換。

（質疑応答なし）

〇現行環境基本計画の全体評価・計画検討の状況について

・　事務局からの資料２−１、２−２についての説明を踏まえ、意見交換。

（大久保委員）
資源循環は進んでいるという評価で素晴らしいと思うが、プラスチックの分別回収を開始してその分別したものに対するリサイクルを含めた課題があれば伺いたい。

（事務局）
特に問題なく進んでいる。一方、開始前の実証の際に見込んでいた量より実際の回収量が少ないという状況はある。

（大久保委員）
マテリアルリサイクルは難しいか。また回収した物について、その後のルートは把握しているか。

（事務局）
個別分野の話になってしまうため、こうした点を深掘りして考えておく必要についてご指摘いただければ整理したい。

（大久保委員）
課題認識として観光が横断軸としてあるが、例えば、テイクアウトを行う際の容器はプラスチックが多いため、それらをどう回収するか、どう減らすかという問題意識も必要である。

（小幡委員）
資料２−１の７ページの環境保全について「環境問題への前向きな取組についての回答が停滞状況」という課題の記載がある。経年変化でみると低下しているのか、横ばいなのか参考資料として付けていただけるとわかりやすくてよいと思う。また、「環境保全活動プログラム参加者数」は目標値に対する達成率が９３％とあるが、コロナの影響もあると思う。書き方として様々あると思うが、課題として停滞と書いてよいものなのか。

（事務局）
ウェルビーイングに繋げるという意図でこのような記載となった。計画としてこのような方向性を目指している点を踏まえて課題をお示しするものと考えている。

（吉積委員）
アンケートについて、1,000 名を対象にしているということだが、世代の割合や地域性も考慮されているのか。

（事務局）
アンケートは後ほどの主観的指標に関わる点でも説明させていただくが、年齢構成、世代構成、居住地域をサンプル配分のファクターとしているため、その部分については把握できている。

（吉積委員）
地域ごとに把握できると、どういった項目について主観的指標が高いのか、低いのか評価できると思う。特に生物多様性の部分で主観的指標の評価結果が低い値であったため、地域で違いがあるのか確認できるとよいと思う。

（桜井委員）
主観的指標について、中間見直しの際には、経年変化を見る必要があるため変更しないという判断だったが、今回は主観的指標を改良していくということがポイントだと思う。その改良について、経年変化で確認するため変更しないものと、項目を新たに追加するものとがあると思う。これまで測ってきた項目として、例えば「空気や河川の水がきれいに保たれていると感じているか」というような部分は、京都市においての話として回答しているのか、メディアの影響で良いと思っているのか、また良いと思っていないか、なぜそう思うのか自由記述などで確認しないと踏み込んだ議論ができないと思う。先ほど小幡委員

からも指摘があったが、停滞かどうかという点について、もう一歩踏み込んだ聞き方を行わないとより深い考察ができないと思う。

（事務局）
次の議題の際にも説明させていただくが、指標について、今までのものを残すことも含め、アップデートしたいと考えている。また、アンケートについては、主観的指標だけを聞いているわけではなく、行動の状況の部分も聞いている。そのため、次の議題でお知恵をいただきたい。

〇次期京都市環境基本計画の構成・環境指標の方向性について

・　事務局からの資料３−１、３−２についての説明を踏まえ、意見交換。

（小幡委員）
環境指標の方向性について、現在、庁内で調整しているという状況か。

（事務局）
この内容については、各部会で検討する必要があり、まずより広い大きな観点から委員の皆様より意見をいただきたい。

（千葉委員）
今後、ウェルビーイングの観点から計画全体や指標を見直すことになると思うが、その際、市民がウェルビーイングを実感できているか問うことが重要になる。また、それが実感できている状態がどのようなことか文章化することが必要になる。例えば安心して暮らせているということや、自然とのつながりを日々の中で感じられているということなど、ウェルビーイングを具体化していき、それを測るということが主観的指標として必要である。
加えて、主観的指標と客観的指標がどう関連しているのか整理する必要がある。例えば、ごみの出し方がわかりやすく負担感なく快適に暮らせているという主観的指標と、分別回収率という客観的指標がどう関連しているのかという点である。そして、分別回収率が上がることで持続可能な暮らしの実現という長期的な目標が達成されていくという、それぞれの繋がりが体系的に整理された上での主観的指標の捉え直しが必要だと思う。主観的指標だけで整理しようとすると捉えきれない部分がでてくるのではないか。

（小幡委員）
ウェルビーイングの説明に関して、冒頭でウェルビーイングを実感しているかということを聞くのか、もしくはごみの分別の指標のような個別の部分で聞くということを想定しているのか千葉委員の考えはどちらか。

（千葉委員）
環境基本計画としては、環境に関連したウェルビーイングが中心になるが、ウェルビーイングの達成ということを最上位の目標とするのであれば、ウェルビーイングが実感できているのかということを聞くことが必要だと思う。ただし、他の調査でそれを聞かれているようであれば設問が重複し意味がないため、他でそのような聞き方をしているのかということの確認は必要だと思う。

（桜井委員）
先ほどのコメントとも重なるが、今回の改定ではこれまで使ってきた主観的指標の項目をゼロからつくり直すのか。経年変化の確認のために必要な項目もあり、例えば「環境保全活動の機会が増えている」というような、継続して測りたいために残すべき項目もあると思う。これらも含めてゼロから作り直すのか、もしくは残すべきものを含めた検討であるのか事務局に確認したい。
もう一点は、ウェルビーイングについて千葉委員から意見があった通り、ウェルビーイングを施策として掲げる場合には、それに関連する指標が必要になると思う。目標として掲げるのであれば環境とウェルビーイングとが直接的・間接的に関連しているものを入れる必要がある。
最後に、今後、環境施策の状態をみるのか、回答者の行動をみるのか、どちらを確認することが望ましいのかという問いについて、市民の皆さんが自ら参加するということが重要であり、施策の目標にもあるため、参加者の行動を確認するような項目も必要になるのではないか。

（小幡委員）
事務局への確認だが、指標について経年変化を確認すべき項目は残し、それに加え新しい部分を追加するという方向性で間違いないか。

（事務局）
基本的にはアップグレードを図りたいという方向性である。

（吉積委員）
先ほどの千葉委員と桜井委員の意見について同意する。ウェルビーイングに関する満足度の指標を設けて調査する必要があると思うが、事務局より説明があったように満足度だけを測るようなものだと環境基本計画との関連性を確認することが難しいため、環境基本計画に関わる指標を設定する必要がある。ＯＥＣＤでもウェルビーイングに関する指標が設定されているため、国際機関の指標を確認し、それらから環境基本計画と関連するものを抽出することや、それ以外にも京都市のウェルビーイングの指標で必要なものは何かを具体的に詰めていく必要がある。

（小幡委員）
環境基本計画の中でどのようなウェルビーイングの指標を整理していくことになるのか議論する必要がある。また、千葉委員から意見があったように、主観的指標と客観的指標の対応関係を図などで示し、わかりやすくする必要もある。

（大久保委員）
アンケートの実施方法についての質問だが、環境基本計画におけるウェルビーイングを測る場合、市民モニターには総合計画に関わることも同時に聴取するのか。

（事務局）
総合計画のアンケートは総合計画単体で行う。環境基本計画のアンケートは、進捗管理の枠組みを継続する形で行う。

（大久保委員）
ウェルビーイングが総合計画でどう位置付けられているかに関わるが、総合計画にもその概念を含める場合、そこに環境の視点を入れてもらうことで全体との関連も整理される。先ほど桜井委員からアンケートについては自由記述の類がないと深掘りができないという指摘があったが、「空気や河川の水がきれいに保たれていると感じているか」ということについて、どのような場所できれいなのか、また、どういう場所で汚いのか、そのようなことを聞くために自由記述を設ける可能性があるのか考える必要がある。

（事務局）
自由記述を設ける可能性はある。

（大久保委員）
主観的指標の項目数について、あまり長くなると回答者が疲れてしまうため、どれくらいの長さにするのかという点は重要である。また、項目数はここまでは増やせるというものはあるのか。

（事務局）
アンケートを執り行う調査会社との協議では、今の設問の項目数が限度ではないかと考えている。

（大久保委員）
そうすると、ウェルビーイングについてどのような設問で確認するのか、もしくは、他のアンケートで確認し、環境基本計画に戻すのかを考える必要がある。また、千葉委員から指摘があった主観的指標と客観的指標の関係については、現状一対一で整理しているが、他の項目とも繋がっている場合がある。例えば、気候変動の危機が迫りつつあるという指

標については、対策として雨庭を増やすことで副次的に生物多様性の増加にも繋がるというようなことがあるため、そうした関係性を見せていくということは環境基本計画のレベルであり得る。また、どうしても変えた方がよい指標もあり、長期的目標３のマイバッグの取組など、すでに取組が進んでいるものは変えやすいと思う。加えて、行動か状態かという点については他の委員からの指摘の通り、両方必要で、長期的目標４では自分がある取組に参加しているかという確認も必要だが、「施策に自分たちの意見が反映されていると感じるか」「自身の意見を出したことがあるか」「参加したことで変わったと感じているか」というような参加によるやりがいの有無を聞くことも考えられる。

（小幡委員）
参加したことによる実感の確認は重要な点である。また、主観的指標と客観的指標の関係についても、全体の項目との関連性を踏まえた整理をしていただければと思う。
「資料３−１方向性、構成（案）各項目」の２ページ目に「観光、ＡＩ・テクノロジー」が新しい観点という記載があるが、「資料３−１方向性、構成（案）全体」の１ページを見ると新たな観点の記述に「観光」が抜けている。観光は新たな観点として含めるのかどうか確認したい。

（事務局）
分野によっては観光分野における環境の課題は、目の前の課題解消に終始し、将来的なテーマとの関連が少ないという観点も考えられたが、２０５０年に向けて京都市が何で成り立っていくのかを考えた際に、目の前のオーバーツーリズムの問題もあるが、外から入ってくるものから京都市の価値を高めるという観点も考えられるため、大きな視点の中には入れる必要があると考えている。
また、指標に関するご意見について、将来目指していく姿とウェルビーイングが結びついたような整理を行わないと環境基本計画としてのウェルビーイングを思案したことにはならないため、その結びつけ方については今後もご意見をいただきたい。

〇ワークショップ（案）について

・　事務局からの資料３−３についての説明を踏まえ、意見交換。

（吉積委員）
テーマについては仮だと思うが、資料で提示されたテーマでよいかは思案している。ウェルビーイング自体がわかりづらい概念のため、それ自体を考えるきっかけになればと思う。今すぐに代替案が出るわけではないが、ここはもう少し考えたい。

（桜井委員）
まずこうしたワークショップの開催自体に意義があると思う。同時にワークショップを開催すること自体にどのような意義があるのかセットで評価できたら理想ではないかと思

う。例えば、参加者にアンケートを取って、ワークショップ開催による自身の意識の変化や気付き、京都市の政策を知るきっかけとなったということなどの項目を評価することで、ワークショップ自体の開催意義の確認ができる。有名な事例では、デンマークなどでは市民参加型のワークショップを頻繁に開催しているが、同国はウェルビーイングが高い国でもあり、こうした取組を行うこと自体がウェルビーイングにも繋がるため、そのような観点で評価することも考えられる。

（小幡委員）
ワークショップのテーマについては、主体別行動指針や施策の方向性へ反映させたいという方針だが、吉積委員からも指摘があり、私たちと京都の環境の観点や、ウェルビーイングの観点についてもどう考えるかは思案の余地があるため引き続き整理いただきたい。

（事務局）
ウェルビーイングの観点から考えたいが、参加者に直接「ウェルビーイング」という文言を出して聞くことは少し違うと認識している。環境との関わりでウェルビーイングが炙り出されるようなものを思案したい。

（大久保委員）
子ども向けの開催について一定期間開催するということだが、これはどういうことか。

（事務局）
京エコロジーセンターなどの来訪者に対して、例えば「将来の脱炭素は進んでいると思うか」という設問などを設けて「そう思う」「そう思わない」という回答からなぜそう思ったのかということを意見聴取する想定である。

（大久保委員）
市長との対話の件について、自身が小学校の頃に市長と対話する機会があった。当時は川にごみが沢山落ちていたことが問題で、そのため皆でクリーンアップ作戦をしたことを記憶している。また清流の条例も作られたが、自身が子どもの頃に参加したこと、発言したことの経験は印象に残る。また自分たちで川をきれいにしようという意識にも繋がった。小学生でもそのような観点で行動に繋がる可能性があるため、子どもとの対話の場に出向いていくことも考えられるのではないか。
また、大学生の参画についても良い案だと思う。ファシリテーターとして参加すると思うが、運営を任せるということの他に、自分の大学でどのようなコミットメントができるのか、自分がどのようなことで関わりを持つことができるのか、もしくは市民委員として審議会に入ってもらうということも考えられるが、そのような次の展開に繋がれば理想的である。また大学へのアプローチでも、学生側からそうした意見が出ると大学側に聞いてもらえる可能性がある。例として自身の大学の学生の取組を紹介したい。大学祭のごみゼロ

の取組でリサイクル食器を利用しようという発案があった。一方で、一部の出店だけで行っても効果が少ないため、大学祭実行委員会と組んでマニフェストを整理し、取組を行わないと出店が開けないという仕組みを学生側で考え、導入した。こうしたその後の取組に繋がるように、意見を聞く際の要素に加えられるとよいのではないか。例えば市長対話に集まった学生のグループで繋がりができるとよい。
主観的指標については、どのような候補があるのか整理し、それに対する意見をもらうことが良いと思う。いきなり改善するために必要なことを聞かれても判断できないと思われるため、意見聴取のための工夫が必要である。

（小幡委員）
今後の予定については、ワークショップ後に次の審議会になり、今回が最後の議論になることから、しっかり意見をまとめていただきたい。また参加者が実感できるという要素も取り入れていただきたい。

（事務局）
ワークショップの枠組みについては了承を頂けたと考えている。問いについては今後さらに意見があれば開催まで思案したいためご意見をいただきたい。

（小幡委員）
テーマとして整理された内容が決まった際には、６月の早い段階までに委員へ連絡していただきたい。意見のある委員は事務局へ提出することでお願いする。

〇主体別行動指針の方向性について

- 事務局からの資料５についての説明を踏まえ、意見交換。

（桜井委員）
具体的な行動を示すことで、市民が行動に取り組むきっかけとなるため良いと思うが、使い勝手のよい指針にする必要がある。例を見るとＳＮＳでの発信という指針もあるが、取組のためには発信しないといけないと思われることや、また、自身はＳＮＳをやっていないという場合も考えられるため、レベル別に分けた方が使い勝手がよいものになるのではないか。例えば初級レベルであれば積極的に情報収集することや周りに共有すること、上級レベルならば発信するということなどが考えられる。分類別に整理されているが、上記を踏まえレベル別にも分けられる良いと思う。

（小幡委員）
関心がある人と、ない人、行動の程度が違う人もいるため、レベル別で分けることも考えられる。

（吉積委員）
具体的な行動を示すことが必要であると思う。一方、指針自体を知ってもらうことが大きな課題ではないか。活用方法として、市のＳＮＳで定期的に発信することも考えられるが、最近は様々な情報が発信されているため、いかに目に留めてもらうのかということが課題となる。また、外国の方や観光客にも知ってもらうためには、ＳＮＳでの発信の他に、ホテルに指針を提示するなどといった示し方も考えられる。ここまで行う必要があるかは別として、例えば行動によってポイントが得られるといったメリットなどがあると行動に繋がるのではないか。指針を作った後にどのような方法で行動に繋げてもらうのかも併せて検討してもらいたい。

（小幡委員）
意見があったように行動による特典の付与や、小学生にもわかるようにすることを踏まえ、行動指針が理解でき、使えるものにすることが必要ではないか。

（大久保委員）
事業者の行動指針に特別項目として市の取組を入れてはどうか。京都市の他の部局は環境というと景観という意識があるのではないかと思う。また、アセスメントや景観以外の環境対策部分は事業者側にも浸透していないと思う。率先的なことを提示するとしても、京都市ではこうしているというグッドプラクティスなどを示すことも考えられる。
事業者の部分では、レベル別で整理してはどうかという意見もあったが、中小の事業者でもできることを整理してはどうかと思う。例えば生物多様性の取組と言われても事業者側で何ができるかわからないという意見があるためである。
滞在者については、どうしたら指針を知ってもらえるのかということが課題ではないか。ごみのポイ捨てについてもごみ箱がないからその場で捨ててしまうという考えもあるが、市としての考えも示しながらごみの持ち帰りをお願いすることも必要だと思う。
日本では当たり前にお土産品はプラスチックの袋に入っていることが多いが、海外では紙で包むという方針に変わっていっているため、プラスチックの包装でお土産を渡すと驚かれることがある。周知については、ＱＲコードなどで指針を読み込めるようにすることも考えられる。
途上国の取組例では、ホテルの石鹸の包装用紙に環境への取組としてこのようなことをしているとメッセージを記載するものがあった。行政が考えることだけではなく事業者からアイデアをもらうことも考えられる。滞在者の観点は新しい分野のため様々なアイデアが出てくるのではないか。

３　閉　会

（以　上）